

# 東金市菱沼土屋家文書から見た 関寛斎とその周辺

本企画展示では、東金市菱沼の土屋家から新たに発見された古文書（書簡・葉書類等）の中から主なものを取り上げ展示します。



関寛斎

## 関寛斎（せきかんさい）

関寛斎（1830～1912）は幕末から明治期の日本医学界に大きな足跡を残した東金出身の医師です。その生涯については「東金市史 総集編」（1987）や川崎巳三郎「関寛斎—蘭方医から開拓の父へ」（1980 新日本出版社）、鈴木勝「関寛斎の人間像」（1979 千葉日報社出版局）、戸石四郎「蘭医・関寛斎」（1980 崙書房）、吉井永「関寛斎物語」（2003 多田屋）、乾浩「斗満の河—関寛斎伝」（2008 新人物往来社）などに詳しい伝記があります。また、司馬遼太郎の「胡蝶の夢」（新潮社）にも取り上げられています。地元東金市では、昭和52（1977）年に「関寛斎顕彰会」が結成され、平成22（2010）年に再結成され現在に至っています。

関寛斎は文政13（1830）年、山辺郡中村（東金市東中）で吉井左兵衛・幸子夫妻の長男として生まれました。しかし、3歳の時に母を失い、その後8歳の時に山辺郡前之内村（東金市前之内）の伯母夫婦に引きとられ養育されました。養父関俊輔（号素寿）は漢学者であり私塾「製錦堂」を開き地域の子弟を教育し、寛斎もその薫陶を受けました。

寛斎の生涯は大きく三つの時期に分けることができます。

第一期 幼年期から佐倉順天堂修業、銚子開業時代

第二期 徳島藩蜂須賀氏御典医の幕末から維新时期、明治前半の徳島開業時代

第三期 北海道陸別開拓時代

です。いずれも困難な波瀾に富む人生でした。その生涯については、本展示の「関寛斎の生涯」コーナーをご覧ください。寛斎は各時期の日記や医療記録などを多く残していますが、**寛斎の人間形成に大きな影響を与えたと云われる幼年時代の史料は少ないので、今回発見された土屋家文書の関素寿書簡（順天堂関係）などは、その手がかりの一つとなります。**



養父 関素寿

## 関素寿（せきそじゅ）

寛斎の養父関素寿（1798～1871）についても「東金市史 総集編」の人物編に詳しい伝記が掲載されています。関素寿は出身の山辺郡前之内村（東金市前之内）に私塾製錦堂を開き近隣の子弟を教育しました。私塾の教育内容については殆ど不明でしたが、平成24（2012）年に発見された東金市求名の並木家文書により、その実態も一部判明しました。並木家文書については東金市教育委員会発行の「東金市求名 並木家文書調査報告」（平成27年）を参照してください。（東金市ホームページの「東金市デジタル歴史館」で見ることができます。）**前之内の関家墓地には明治30（1897）年に建立された素寿顕彰碑もあります。その中心となった土屋栄司も素寿の門人であり、土屋家文書からは建碑関係の史料も発見されています。**

## 斉藤龍安（さいとうりょうあん）

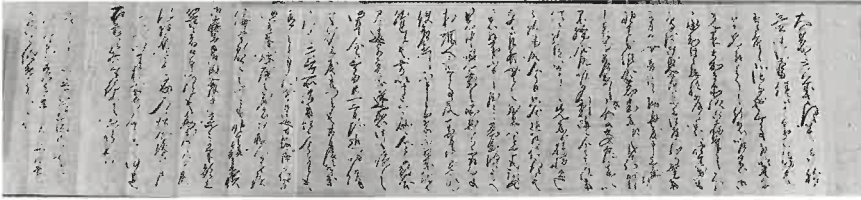
斉藤龍安（1846～1920）は弘化3（1846）年山辺郡菱沼村（東金市菱沼）に斉藤文左衛門・志乃の次男として生まれました。順天堂で医学を学ぶと共に文久3（1863）年、関寛斎が徳島藩主蜂須賀斉裕の侍医となり徳島に赴任すると、門弟として随従し医学修業を続けました。その後戊辰戦争では寛斎の助手として活動し、維新後は北海道や福島県の近代医療に大きな貢献をした人物として評価され「北海道医報」や「福島県医権録」などにも記録されています。しかし、**地元東金地方では余り知られていないし、その生涯も判然としていません。今回土屋家文書から発見された多数の斉藤龍安書簡などにより判明する部分も多くあると思います。東金出身の近代医療への貢献者として、斉藤龍安にも注目していただきたいと考えます。**



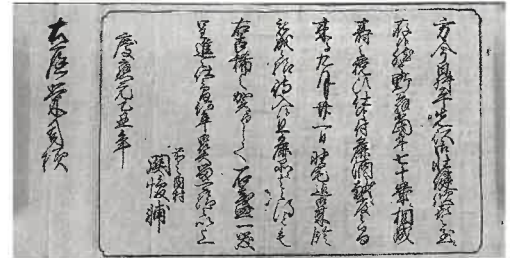
門弟 斉藤龍安

- 開館：令和元年10月30日（水）～約1年間
- 会場：東金文化会館 常設展示室
- 主催：東金市郷土研究愛好会・東金関寛斎顕彰会
- 後援：東金市・東金市教育委員会 問合せ先：東金市教育委員会 TEL 0475-50-1187

# 1. 関素寿書簡



【史料1-5】 今関俊輔書簡 土屋嘉左衛門あて(順天堂関係) (え103-1)

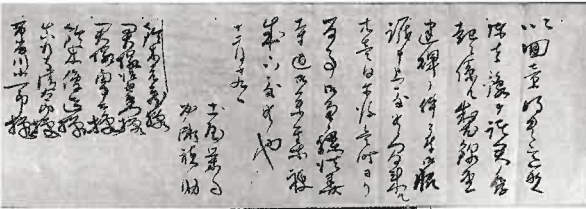


【史料1-16】 関俊輔書簡 土屋栄司あて (え102-6)

史料1群は、関素寿(俊輔)の書簡です。素寿は関寛斎の養父、師匠であり、寛斎の生き方に大きな影響を与えたと云われています。しかし、そのことを示す史料は余りありません。先年、東金市求名の並木家文書調査から発見された製錦堂塾則や数通の書簡などが数少ない例です。今回、土屋家文書調査から発見された約30通の関係書簡は貴重な史料となります。史料1群はいずれも関素寿の書簡ですが、前半は今関姓であり、後半は関姓に改姓しています。宛名はいずれも土屋家当主であり、前半は前之内村の隣村菱沼村の村役人を務める土屋嘉左衛門あて、後半はその孫栄司あてです。栄司は寛斎より少し年少ですが素寿の製錦堂に学んでいる同門です。この一連の書簡のうちには注目すべき次のような書簡もあります。史料1-5今関俊輔書簡では、「野生義佐倉愚息江月俸料小遣等差遣度候処、当節甚以不繰合故、…愚息師之方へ暑中見舞之品物等…何卒金三両廿一、二日頃迄時借奉願上度」と寛斎の順天堂遊学中の学費に苦心している様子が語られています。史料1-16・史料1-17 関俊輔書簡では、70歳の古稀を迎えた素寿の感懐の漢詩を述べ、祝宴に招待しています。

※注:関素寿は、書簡では「俊輔」と書いています。

## 2. 関素寿と製錦堂



【史料2-1】 製錦堂建碑二付廻章(C3-10)



関素寿顕彰碑

史料2群は、明治30年建立の関素寿顕彰碑をめぐる史料です。史料2-1製錦堂建碑二付廻章は建碑の中心となった土屋栄司から前之内、菱沼、二又の三地区の関係者に送られたものであり、先年、並木家文書から発見された史料2-2土屋栄司書簡と符合するものです。

### 関素寿の私塾「製錦堂」経営

関素寿は幕末から明治初年にかけて山辺郡前之内村(現東金市)で私塾を開き、近隣の子弟の教育に力を尽した学者、教育者です。素寿は、寛政8年、前之内村の君塚兵左衛門の長子として生まれています。故あって村内の今関家の養子となりましたが、のち関姓に改姓しています。『千葉県教育百年史』(昭和10年)にも「第五節山武郡の私塾及寺子屋教育」のなかの私塾表にも「学科読書習字 所在地 豊成村前之内 塾主関素寿」として掲載されていますが塾名、開業期、生徒数などは不明としています。『東金市史 総集篇五』(昭和62年)の「人物篇」には関素寿についての詳しい紹介があり、その教育については「読書、習字に力を入れたことはもちろんであるが、日常の行儀作法のしつけには特に心を用い、清掃指導にいたるまでキメこまかく仕込んだようだ、…また「製錦堂百ヶ条」という教戒を作成したということであるが、それらがどのような内容のものであるかは文献が残存していないので、何とも言いかねる。」としています。東金市求名並木家文書から「製錦堂百箇条」が発見されたので、教育実態、グループ学習的な側面をうかがわせる部分もあります。近世の教育における三要素である素読、講義、会読のなかで会読の重要性、近代性との関連も考えられます。

### 寛斎の養父素寿の碑

「製錦堂関先生墓碣銘」で、寛斎の養父関素寿を顕彰した碑です。素寿は君塚兵左衛門の長男で前之内新田の今関家の養子となり、後に関と改姓し一家を興しました。素寿の妻年子は寛斎の生母幸子の姉です。素寿は製錦堂という塾を開き近隣の子弟を集めて教育した儒者でした。塾名「製錦堂」の由来は、「春秋左氏伝」の段にある「子ニ美錦有ラバ、人ヲシテ製ツコトヲ学バシメザラン」から取ったもので、錦の如き人材を育成しようという抱負を示した命名と思われます。門弟は数百人ともいわれ、多くの人材を世に送りました。この碑は明治30年4月その功を賛え門下生により建立され、順天堂医院三代院長佐藤舜海先生の撰文、題額は蜂須賀茂韻候の筆によるものです。

素寿の教えは、「礼儀作法・善悪のけじめ・労を惜まず働く・慈愛と博愛の精神・不撓不屈の精神・書写力作文力を身につけよ・質素儉約・志を高く持て」で、権勢を恐れず武威に屈せず、富貴をうらやまず、卑屈に流れず、堂々と生きる気概の人で、寛斎の人間形成に深い訓化を及ぼしたと思われます。寛斎のバックボーンは素寿によって作られたと言っても過言ではありません。

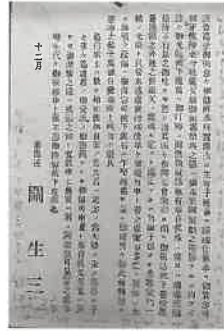
### 3. 関寛齋、関生三、関又一の葉書・書簡



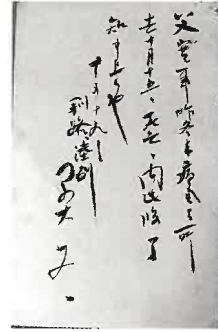
【史料3-9】 関寛葉書  
土屋栄司あて(D25-1)



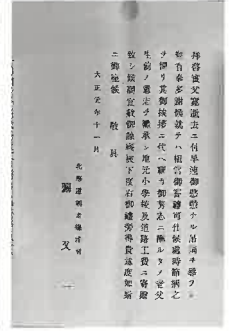
【史料3-13】 関寛葉書  
土屋栄三あて(D23)



【史料3-16】 関生三葉書  
(C23-2)



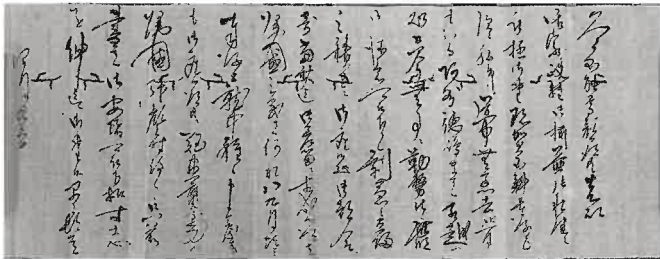
【史料3-27】 関又一葉書寛齋  
死亡通知(C11-8)



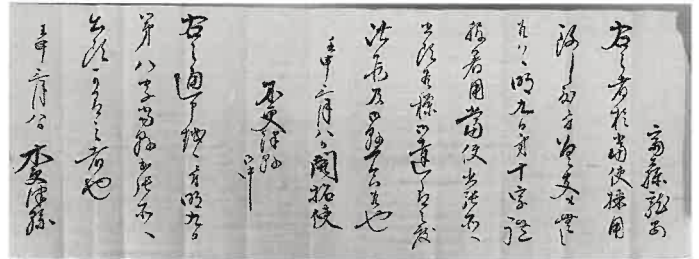
【史料3-28】 関又一書簡  
(D12-1)

史料3群では、関寛齋・生三・又一親子の書簡を紹介しました。殆どが徳島時代後半と北海道移住後の葉書です。史料3-2関寛葉書では、「亡父建碑ノ儀万々御礼申上候也」と顕彰碑建立の尽力に感謝しています。史料3-6関寛葉書は北海道移住直後のものであり、北海道の自然の厳しさと牧場の様子を報じています。史料3-9関寛葉書では、「命の洗濯」出版、配布のことを依頼しています。土屋家には寛齋82歳の肖像写真(目録せ-45)や生三家族写真(目録せ-46)も送られており、土屋家との親昵な関係をうかがわせます。また、史料3-27関又一葉書では寛齋の死亡を通知し、史料3-28関又一書簡では、(明治天皇崩御の)時節柄相当の御答礼を憚り、「御芳志ニ酬ルタメ老父生前ノ意志ヲ継承シ地元小学校及道路工費ニ寄贈」と述べています。

### 4. 斉藤龍安書簡



【史料4-1】 斉藤龍安書簡 土屋嘉左衛門あて  
(え102-9)



【史料4-10】 斉藤龍安あて 木更津県通知  
開拓使採用通知(い5-5)

史料4群では、斉藤龍安の書簡を紹介しました。龍安は、菱沼村出身の関寛齋門人であり医師としても実績を残し、北海道や福島県における近代医療史にも大きな足跡を残しています。しかし、地元東金地域で殆ど知られていなかったし、史料も発見されていません。今回土屋家文書から発見された書簡は内容も豊富であり、龍安の活動を知る貴重な史料となることと考えられます。史料4-1・史料4-2斉藤龍安書簡は、寛齋に随従した徳島時代のものであり、寛齋の徳島移住初期の動静も知られます。史料4-8斉藤龍安書簡は、戊辰戦争最後の箱館戦争に従軍する直前のものです(文書館所蔵)。史料4-10木更津県通知は、開拓使関係のものであり、龍安が初期の北海道医療に重要な役割を果たしたことを示しています。史料4-12斉藤龍安書簡は福島発信であり、福島における龍安の医療活動をうかがうことが出来ると共に土屋家との親密な関係を示しています。

### 5. 種痘論文

史料5-1佐倉医学所種痘論文は、関寛齋も従事した佐倉藩、順天堂の種痘奨励を示しています。この史料は反故紙の包紙として他の文書を包装したものです。当時は広く流布したものと思われませんが、現在では珍しいものです。史料5-2佐倉子育方役所種痘論文も同じ趣旨で刊行されたものであろうと考えられます。この史料は元来、東金市上宿の中島家文書の一つでした。昭和47年に中島家から成東町歴史民俗資料館に寄贈された張交屏風の下張として反故にされたもので、最近同館(現山武市歴史民俗資料館)の調査により発見されたものです。江戸時代の病気被害の重要なものに天然痘の流行がありました。天然痘の予防策としての牛痘接種は、寛政8(1796)年イギリス人エドワード・ジェンナーにより成功しました。それが日本に伝来し、長崎で牛痘接種に成功したのは嘉永3(1849)年7月でした。その年12月には佐倉藩でも実施され、全国へも広まっていきました。

## 6. その他の史料



関寛斎の写真  
(せ45)



関生三家族写真  
(せ46)



斉藤龍安夫人  
以佐の写真  
(せ48)



斉藤龍安家族写真  
(せ47)



土屋家全景写真 (せ28)



土屋栄司写真  
(せ9)



土屋栄三家族写真  
(せ29)



関寛斎著『目佐まし草』  
(c111)



関寛作裁縫用反故張子 (か26)

## 7. 奥羽出張病院旗

### 「奥羽出張病院旗」の云われ

戊辰戦争(1868年)が始まると、蜂須賀藩主茂韶侯は討幕軍に加わり、寛斎も軍医として従軍しました。江戸・上野の山での彰義隊との戦いで医師としての手腕が、総指揮官大村益次郎の目を引き、奥羽越列藩同盟との戦いに大村は寛斎を奥羽出張病院の頭取(院長)に任命しました。寛斎は軍艦で平潟港(現・茨城県)に到着、同地の寺に病院の本院を置き、戦場の移動につれて救護所を設けました。性源寺(現・福島県)に移された時、その所在地が傷病兵にすぐにわかるように「病院旗」を掲揚して救護所の目印としたのです。これは寛斎の発案と言われています。そして、敵味方の区別なく治療に当たった行為は、我が国の赤十字事業の先駆とされています。



(東金市教育委員会所蔵・関静吉氏贈)



軍服姿の関寛斎



奥羽出張病院の医師達

関寛斎は戊辰戦争が終わると、東京にとどまることなくすぐに徳島に帰りました。栄達を望まない気概は養父素寿の教えが生きているのだと考えられます。

本事業は、令和元年度東金市市民提案型協働事業「歴史と文化のまち東金をみんなで学ぼう」の一環として、九十九里地域の中心として栄えてきた「私たちの東金」の歴史と文化を学び、その研究成果等を東金市の皆さんをはじめ、広く世に発信し、後世に引継ぐことを目的に行うものです。